

## アマダイのフィンランド紀行

近ツリ「フィンランド満喫6日間」2011. 8. 9～

### フィン紀行①プレフィンランドツアー

間もなくフィンランドツアーだ。新宿の紀伊国屋へ。「物語フィンランドの歴史」を探すが、未出版のようで、「物語北欧の歴史」を買う。図書館で「地球の歩き方フィンランド？北欧？」を借りようと思うがなし…。るるぶ版もない。ツアーは勉強のいい機会だ。人生は革命と恋と生涯学習だ！？帰宅すると近ツリから最終案内が届いている。4日目の12日午後から13日夕方のフライト前の集合まで自由行動だ。この時に寮で2年後輩の丸山大使と大使公邸で会食出来ると嬉しい！丸山君と同期で、夫妻で同行する勝部君に連絡役をお願いする。

図書館で借りた「フィンランド・豊かさのメソッド」（堀内都喜子、集英社新書）を読み終え、「フィンランドを知るための44章」（百瀬宏、石野裕子編、明石書店）を読み始める。多少当り外れがあるが、それぞれの国の歴史や文化、政治、経済などを総合的に、手短かに理解するには便利なシリーズだ。これに「物語〇〇の歴史」（中公新書）、「旅名人シリーズ〇〇」（日経BP）があればより理解が深まる。

知人の紹介でミサワホームのフィンランド駐在員が来社。能代の隣の大館鳳鳴高校出身で、僕も6年間ミサワホームグループで働いていたので、共通の知人も多く話が盛り上がる。森と湖の国で木材産業が盛ん、関連産業からノキアのような最先端のグローバル企業も派生するが、僕も参画するベンチャービジネス、ウッドプラスチックの類の産業はないと言う。技術立国を目指すフィンランドだが、木材資源が豊富で敢えて木屑を有効利用する必要がないのか？木材産業が盛んならウッドプラスチック原料の木屑も大量発生する。フィンランドでもバイオマスプラスチックに再利用できる筈。世界中で木材を有効利用し、石油やガス由来のプラスチック製品に代替、化石資源の使用と炭酸ガスの排出を抑制、地球温暖化も防ぐ、木材産業の「世界革命」を！

### フィン紀行②森林から情報通信へ、そしてノキアの失速

森の中の雨のヘルシンキ空港着。外気温15度。お陽様が顔を出すとそれなりの暑さ。ムーミン谷のタンペレまで森の中のハイウェイを2時間半のバス旅行。日本から北海道を取った程のフィンランドの国土面積の四分の三は森林。80年代までの主要産業は紙パルプ・木製品等の森林産業。輸出に占める関連製品の割合は1920年代には8-9割、1960年代には7割、90年には4割、最近では2割。1990年代以降、バブル経済が崩壊、最大の貿易相手国ソ連も消滅（1991年末）。輸出総額に占める旧ソ連のシェアは80年代の4分の1から92年には3%にまで急落。90年-93年の3年間にGDPが11%減少、失業率は3.2%から16.3%に急騰、一時20%超の危機的状況に。

1990年にイノベーション立国を国家戦略に掲げ、93年末には「創造的社会に向けての戦略」をまとめ、産業クラスター戦略を打ち出す。「葡萄の房」の様に企業・研究機関・官庁等、産学官を有機的に繋げ、国際競争力のある産業を地域的に集積する形態を目指し、IT等に集中投資、

見事な産業構造の転換を実現。530万人と北海道より人口が少ない国に、世界一の携帯電話メーカー、ノキアが育つ。

ノキアはフィンランド最大の企業で2003年のGDPの4%、研究開発費の45%、輸出の25%、製造業雇用の5%を占める。ノキアは1865年に材木、ゴム靴、ケーブル等の製造を目的に創業された。最近まで世界一の携帯電話会社の名を欲しいままにしたノキアだが、アップルがiPhoneを市場に投入、Googleが携帯電話の基本ソフト、アンドロイドを公開、サムスン等がアンドロイド搭載の携帯電話を出し、スマートフォンがシェアを広げる。スマートフォンの開発に出遅れたノキアは、携帯電話市場でのシェアを下げ、サムスンに次ぐ3位に後退、赤字に転落。急遽マイクロソフトと提携、マイクロソフトの新しい基本ソフト搭載のスマートフォンで巻き返しを計ろうとするが劣勢の挽回は可能か？ノキアの、フィンランド経済の次なる変身は可能か？教育、医療、年金等の高度な福祉の源泉であるITを中心とした産業の競争力が失われた時、その維持は可能か？興味を募る。

### フィン紀行③高い税金にも満足。安心を買う！

夏の北欧の15度には冬の台湾の12度ほどの驚きはない。背中からジージャンを出し重ね着。台湾と違いバスには冷房はなくても暖房はある。ひたすら緑の林の中を走り、ガソリンスタンド、レストラン、ミニスーパー併設の大きなドライブインで一度トイレ休憩。23%の消費税が付き、40ユーロ以上買う旅行者には還付してくれるが、物価は高い。震災復興の財源をどうするか？20%超のヨーロッパ諸国に比べれば、上げて10%という日本の消費税は高くはない。消費税を上げればその分消費が抑えられ、経済が失速するというが、同じ金額が目的を変えて復興のために使われるのだから、消費という点ではイーブンだ。おまけに増税前の駆け込み需要や貯蓄に回る分が復興に使われるのであれば、その分経済を活性化する。問題は増税しただけのものが復興のために、国民のために有効に使われるか？国家の意志と能力に対する信頼の問題だ。社会保険料も入れた日本国民の租税負担率は30%ほど、先進国ではアメリカに次いで低いが、50%超の北欧以上に税に対する不満が強い。

アメリカと違って医療保険が機能し、医療には国民はそこそこ満足しているが、子育て、教育、介護、高齢者福祉には金が回らず、個人の責めに帰する部分が多いので不満が強い。保育園が不足し働きたくとも働けない。働けても子育て世代の親の負担は大変だ。介護や老後の年金が不十分で貯蓄に励まなくてはいけない。フィンランドのように保育や教育は社会の責任で無料、高齢者の介護や生活は国が面倒をみるなら、三千万円貯めてリタイアしてもまだ不安、結局貯め込んだお金も使えずに死んでしまうより、国を信じて2千5百万円先払い、謂わば個人の口座ではなく国庫に貯蓄、万が一の5百万円の貯金だけで、悠々自適、安心の老後を送るかの違いだ。

言ってしまうとみもふたもない話だが、政府を信用出来るか？自分が信頼に足る政治家を選んだかの違いだ。フィンランドの選挙は比例代表制で小党が分立、政策調整の上で連立政権が生まれ、話し合いの政治が機能している。民主政治が成熟、保守が政権を握っても革新が政治を主導しても大枠は変わらないという、国家の大方針への信頼もある。国民は国庫へ貯蓄、税という形で

高度の福祉の対価を払い、子育て、教育、医療、雇用、介護、老後の安心の社会化という、最高のサービスを買っているのだ。明治の初期、新政府が郵便貯金制度を作って国家建設資金を集めようとしたが、民間の信用補完が必要で、僕の先祖も郵便局長として貢献、既得権化して兄の代まで四代世襲した。郵貯や簡保資金による財政投融资制度は廃止されたが、銀行や郵便局、保険会社が集めた国民の貯蓄で国債を買う形で、国民の国家への信頼はかろうじて残る。政治の成熟、国家の安定した大方針の形成が待たれる。

時差6時間の夕方6時半、日本では真夜中の12時半にタンペレのホテル着。バスタブなしで物足りないがシャワーをすませ、持参のツマミで日本酒を寝酒。持参のポットで湯を沸かし、ミニカップ麺で空腹を癒し、8時位にベッドに潜り込む。朝は2時起き、6時半から食事、8時半ホテル発でタンペレでムーミン三昧。イッタラでサーモンの昼食、古都トゥルクで史蹟見学後ナンタリへ走り。宿泊はスパホテル、アマダイは水を得た魚に変身出来る！

#### フィン紀行④これもウォシュレット？！

森と湖の国らしく、タンペレのホテルの水道水は直接飲めると添乗員の高木さん。気がつけば木張りの床、気に入った。トイレに蛇腹の水栓。手動式ウォシュレットだと勇んでレバーを押すが、水は噴射しない。蛇腹は洗面器の下から伸びる。洗面器の水を流し放しにしてレバーを握ると水栓から水が噴き出す。トレードオフの関係だ。電気がストップしてもお尻は気持ちいいが、わざわざ洗面の蛇口まで手を伸ばすのは面倒だ。日本のウォシュレットと大違い。

朝6時半になるとテレビが勝手につき、そのままにしておくるとどンドン音が大きくなる。モーニングコールがテレビにプログラミングされている！さすがITの国。朝食はビュッフェ。ハム、ソーセージ、サラミ、チーズと肉の種類が多いが、オムレツや目玉焼きを作ってくれるコックは不在で、フワフワしただしの利かない卵焼があるだけだ。パプリカとトマト、胡瓜の薄切りに胡瓜のピクルスと野菜は少ないが、鯿の他に鯛らしき魚の酢漬も。デザートは西瓜。

食後まずマーケットホールへ。人口21万のフィンランド第二の町の胃袋。9時では開店していない店もあるがスイーツとコーヒー、新聞が好きなフィンランド人でカフェは結構繁盛だ。因みに新聞は宅配で、日本に次ぐ購読率を誇るが、ネットとの関係でその運命は如何に？トナカイの頭の剥製を看板代わりにする肉屋では鳥、豚、牛の他に脂の少ないトナカイの赤身肉も。それらのソーセージや燻製なども売られる。豆や粉を売る店では挽かれて袋に入ったコーヒーも売られる。フィンランド人は平均一日8杯も飲むコーヒー好きだ。魚屋では生きたザリガニから鮭、鯿、鯛、岡山名物ママカリ様の鮮魚の他に干物、酢漬まで色々売られるが、魚の種類は日本の魚屋の方が多そうだ。玩具屋では世界のキティも笑顔を振り撒く。

八百屋ではライ麦パンを押し退け、今やこの国の主食となった南米産世界のジャガイモも、小粒な割に大きな顔をしている。南米でインディオを滅ぼしかけた悪魔のスペインも、ヨーロッパでは救世主だ。金、銀、宝石、ジャガイモとトマト、トウモロコシを、忌まわしい略奪者スペインがヨーロッパにもたらさなかったら、今のヨーロッパとその食生活はあっただろうか？トウモロコシが目につかないのは寒冷で育たないからか？ここは我が故郷白神よりさらに北の果て！

## フィン紀行⑤ムーミン谷は谷！？

タンペレの町の一番の目玉はムーミン谷。21名(男は夫妻で同行の勝部君の他には新婚旅行の婿殿2人)の過半を占める若い女性の目当てはムーミンとカモメ食堂だ。カモメ食堂という映画の存在自体、ましてフィンランドが舞台の日本人主演の日本映画だということも知らなかった。ムーミンの存在は知っていたが、フィンランド生まれということは知らず、タンペレにムーミン谷があることも知らなかった。次にムーミン谷はタンペレ郊外のどこかの谷一杯に展開するディズニーのようなテーマパークだと思ったのだが、ホテルからほど近い街のど真ん中の市立図書館の一階にさりげなくあった。

作者のトウベ・ヤンソンは社会主義ソ連とファシズムドイツに翻弄されながら悲惨な第二次世界大戦に巻き込まれる祖国を憂え、ムーミンにさりげなく戦争の悲惨さを訴えさせ、風刺とユーモアで戦争反対を叫んだ。それは又、小国フィンランドが大国スウェーデンとロシアに六百年以上も支配され、独立後も大国の間で申听、第二次大戦後は冷戦の谷間で「北欧の東欧」と呼ばれ、西側の一員ながら隣の大国ソ連の顔色を伺い、実質的にソ連に支配されているかのようにも見えながら、平和主義を掲げ、独立を維持、東西を取り持ったことに通じる。それを「フィンランド化」と揶揄する向きもあるが、高く評価していい。隣国ソ連へのフィンランドの対応は又、世界第二の経済力を原資に軍事力を強め、軍隊が発言権を増し、「歴史的な領土の回復」を掲げ、遙か遠く、西沙や南沙の島々の領有まで主張、膨張主義に転じたかの如き隣の大国、中国への対応でも学ぶべきものがある。大国に脅威を感じる周辺国を糾合、共同対処するのも一法だが。

第二次大戦中もソ連軍の侵入を国民の英雄的な戦いで退けたフィンランドだが、敗戦と共にソ連に領土の一割を割譲、三億ドルの賠償を課され、紙やパルプ、船舶や金属機械等の物品の供与を義務付けられた。だがフィンランドはそれを梃子に機械や造船産業を大きく成長させ、金属機械産業は、ノキアを代表とする情報通信産業が登場するまでは森林関連産業と共に戦後フィンランド経済を支えた。戦後の厳しい状況からの急速な復興という点で共通する日本とフィンランドだが、バブル経済崩壊からの立ち直りという点では明暗を分けた。フィンランドにとっては主要な貿易相手国ソ連の崩壊が重なり、一時失業率が20%を越すという、待ったなしの、後のない奈落の底に突き落とされたからだろう。そこまで落ち込まなかった日本は遅々として経済が回復せず、茹でガエルのように緩やかに落ちていく。東日本大震災と原発事故という、待ったなしの危機からの復活のために、今、フィンランドから学ぶべきものは多い。

ノキアの急失速で心配なフィンランドだが、高度な教育と柔軟な社会構造、それを支える充実した社会福祉が、ノキアの復活を支えるか、第二、第三のノキアを生み出し、産業構造を高度化することによって可能にするのではないか。素敵でムーミンの国を旅する者として、そうなることを期待したい。

## フィン紀行⑥ムーミンの街は革命の街

ようやくフィンランド本二冊目「フィンランドを知るための44章」を読み終えるが、紀行文は2日目から先に進まない。今日は5日目で、もうヘルシンキを発つ日だというのに！

タンペレ大聖堂を見学して次の目的地イッタラへバスは走る。ムーミンの街を出ようとする時にタンペレにはレーニン博物館があるとガイド。1905年12月タンペレの現在の労働者会館でボリシェビキの会議が行われ、民族自決主義者レーニンがフィンランド独立運動の推進を市民代表団に誓ったことを記念、労働者会館内にレーニン博物館が開設された。この時レーニンとスターリンが初めて会ったというのも興味深い。民族自決はボリシェビキの綱領だが、ロシアからの解放はフィンランドやポーランド等ロシア帝国への併合期間が短い地域に止まり、民族自決は徹底されず、1991年末のソビエト連邦の崩壊を待たなければならなかった。ロシアで未だに民族紛争が続くのは民族自決のプロセスが未完であることを示している。24年のレーニン死後、トロツキーとの権力闘争に勝利し、スターリンがソビエトの権力を握り、民族自決原則も大きくねじ曲げられた。ねじ曲がったままの民族自決綱領を受継いだのが中国だが、チベットやウイグル等の独立運動をどう解決するのか？その時中国はどうなるのか？

タンペレの街の北のナシ湖の水が急流タンメルコスキとなり、水位を18m下げ南のビュハ湖へ注ぐ。急流は水車を回し、水車は電気を起こす。タンペレには19世紀初頭、紡績業が起き、フィンランド最初の工業都市として「フィンランドのマンチェスター」と呼ばれ、発展する。1917年レーニンの指導するボリシェビキは十月革命によりケレンスキーの臨時政府を打倒、12月31日、レーニンの署名でフィンランド独立を承認する。翌1918年1月首都ヘルシンキに革命政権が誕生。対するスヴィンフッド政権は東ボスニアのヴァーサを本拠とし、内戦が勃発。産業都市は又、労働者の街でもあり、左派政権の拠点となる。3月下旬から4月上旬にかけ、左派政権の拠点タンペレで赤衛軍と白衛軍が激突、市街戦は白衛軍の勝利に終わる。フィンランドでは独立戦争と解釈するが、新しい国家の誕生を巡り、自国民同士が互いに血を流した内戦だ。ソビエト政府はロシアに続きヨーロッパ全土に革命が波及することを想定、フィンランド革命政権にも希望を託すが挫折。レーニン死後、世界革命路線から一国社会主義路線へと急旋回する。

IT産業への構造転換とその隆盛により高度福祉社会を実現したフィンランドだが、雇用制度の柔軟化、複雑化とEU域内からの移民はもとより、各国からの難民の流入により格差の拡大も進む。冷戦が終わり国の垣根が低くなり、経済のグローバル化が進み資本主義的生産様式が今ようやく、世界全体を飲み込まんとする時、レーニンの時代とは様相を異にした世界革命の前夜にあるとは言えないだろうか？

## フィン紀行⑦トナカイで日本酒

タンペレを発ったバスはヘルシンキからと同じくらいの距離を、古都トゥルクへ向け南西に走る。途中、知らぬは僕一人だけの有名なイッタラのガラスセンターで買物と昼食。シンプルですっきり、機能的なデザインの国フィンランドらしいガラスや陶器、金属や木、織物製の日用雑貨の他にムーミン雑貨も。旅女はいつも買うのが好きで、だから牝牛はCOWというのだと思っているが、予想に違わず、フィンランドに行ったらイッタラで買い物をするのだと決めていたらしく、品定めに余念がない。仕方なく外のベンチに一人腰掛け、旅行作家！？に変身！ガラスセンターの昼食は美味しいサーモンのグリルを肴に地ビールを飲む。レギュラー缶3,8ユーロ。

更に古都トゥルクへ。スウェーデン領の時はこの町が首都だったが、ロシアの支配に変わり、ロシアに近いヘルシンキに首都が移された。大聖堂、野外のマーケット広場、屋内のマーケットホール、トゥルク城を見学。移民や難民が増え、ルーマニアやブルガリアからロマ（ジプシー）も流れて来て治安が悪くなったと、ベテラン日本人ガイド。治安が悪化すると「外人のせい」にするのはどこの国も同じだ。この町の中心部のマンションが60平米で2千万円とも。黒い肌の娘三人が番をする店もあるマーケットホールで、ガイドお勧めのトナカイの燻製を買う。

ここの造船所でロシアの賠償用の船も造られた河口に発達した港町、造船所のクレーンが並ぶ町から、ムーミンワールドのあるリゾート、ナンタリのスパ・ホテルへ。ホテルのレストランでサーモンの前菜とチキンのグリルを肴にビール一杯6・5ユーロでは足りず、地酒の蒸留酒コスケンコルバを頼むがなく、ジンのカクテルを頼む。こちらは7ユーロ。因みにミネラルウォーターは2ユーロ、ソフトドリンク2百ml1・9ユーロ、4百ml2・8ユーロ。トナカイの燻製で日本酒を寝酒するが、塩がきつくて、今一だ。

### フィン紀行⑧森林大国でウッドプラスチック「革命」を！

三日目の朝7時からのビュッフェの朝食を終えナンタリ・スパ・ホテルのプールに。広くて綺麗、温かくて気持ちいい。本場のサウナも体験。ゴルフ場の狭い木製のサウナしか知らないが、広いタイル張りで暗い中、湯気で周りがよく見えない。バスで近くの海辺の、夏だけ開園のムーミンワールドへ。栈橋を歩いて渡ったムーミン村ではお馴染みのキャラクターが出迎えてくれ、歌や踊りで大歓迎。子連れの家族は大喜び。勝部夫妻とざっと見て、温かいピザでビールでも飲みたいねとレストランを訪ねるが、ムーミン家は下戸だからか？子供の国だからか？ソフトドリンクしか置いていない。仕方なく早々と対岸のレストランへ。

高級レストランへ入ったようで調度も雰囲気も素敵。茹でて殻を剥いたザリガニの乗ったシーザーサラダ、白身魚のフライ、砂糖大根とチーズのパスタ、フライドポテトに乗った掌状に叩いた大きな牛カツをシェア、ビール、ワインを楽しみ、念願の地酒、蒸留酒コスケンコルバをようやく味わう。ウォッカ似だが、冷やし方が足りないか？あっさりして、甘味、とろみが少ない。フィンランド料理は不味いという定評を覆す味に、グルメの勝部夫妻も美味しいを連発。

食後バスでヌークシオ国立公園へ、森と湖の間を走る。所々収穫期で金色に輝く麦畑や牛や馬が草を食む傍らに、長い冬を乗り切るため、白くパックされた乾し草のロールが転がる牧場が広がる。国土面積の4分の3は森林で、森林の成長量は伐採量より2～3割も多く、現在は独立以降最大のストック（20億立方メートル）を誇り、輸出に占める森林産業関連比率2割を未だ維持する木材大国フィンランド。木材は製品化の過程で半分は木屑と化し産業廃棄物扱いされる。その木屑6～8割にプラスチックを2～4割均等に混ぜ、プレス成形、木とプラスチックの両方の良さを備えたバイオマスプラスチックの新素材を合成、安価でエコな、プラスチック代替製品を世に出そうと、先ずベンチャービジネス(株)ウッドプラスチックテクノロジーを友人と創業、搬送用パレットを世に出した。出来ればフィンランドの木材産業の片鱗でも垣間見ればと思ったのだが、高速道路沿いの並木越しに一ヶ所、一瞬目にしただけで残念だ。

遠くない将来、ムーミンでも、カモメ食堂でもなく、レーニンと森林産業の視察のために、この国を訪れたいものだ。木材産業の盛んな所では木屑も大量に出る。そこは又、ウッドプラスチックの工場適地でもある。それは世界の森林資源の有効活用、化石資源の使用抑制、二酸化炭素排出抑制の大革命の拠点ともなる。かつて夢見て果たせなかった「世界革命」を！？

### フィン紀行⑨異郷で故郷を懐う

バスは道中何度か激しい雨に見舞われながら、「かもめ食堂」の舞台になったヘルシンキ郊外のヌークシオ国立公園へ。フィンランドらしい森と湖の風景をハイキング。氷河期の終わりに、柔らかい表土は氷と一緒に海に流され、固い岩盤に覆われた国土が残る。数千m厚の氷の重さから解放され、未だに隆起が続く。地震はないが農耕地は少なく、岩盤にへばりつく様に生える木々は強い風に倒される。ゴロゴロしている風倒木をミミズや白蟻等の小動物、腐朽菌等の微生物が腐葉土に分解し、風化し細粒となった岩石と共に、長年月かけて表土が形成される。

白神山地の懐に抱かれ、日本海の波に揺られて育った人間が遥か異国で、わざわざハイキングすることの不思議。裏山で杉の切り株に腰掛け、冷たいせせらぎに足を浸し、木漏れ日で本を読み、十二湖の青池の神秘の藍に感嘆の息を呑み、アワビやサザエを求め、アイナメを追いかけ、日本海の底知れぬ蒼に学んだ自然への畏怖。ヘルシンキの森と湖で故郷の少年時代を思い出す。白神の森と湖を首都の眼と鼻の先で思い出すことが出来るのは、少ない人口が国土に分散し、人口57万人と小振りな首都故か？ブルーベリーやコケモモ、スグリの実を採り、味わう。アケビや烏瓜はないという。市民が普通に週末をのんびり過したり、茸やブルーベリー狩りをして、瓶詰めやジャム作り等を楽しむ別荘が点在する。

雨上がりの虹のかかる森を後にかもめ食堂、カフェ・スオミへ。小柄で茶色の髪の毛を除けば日本人と見紛う夫婦と、スラッとした看板娘がフロアを切り盛りするカフェ・スオミは街の定食屋さん、日本人で大盛況。名物の肉団子定食を食べる。カボチャと豆のスープ、サラダを自分で皿に盛り、皮つきのじゃがいもも肴に地ビールと地酒のコスケンコルバを飲む。少し酸味のあるライ麦パンも美味しい。なぜ南米原産のじゃがいもに主食の座を奪われたのか。かつて原産地ペルーを旅した時、4千メートル超の峠にもじゃがいもは植えられていた。ライ麦よりもじゃがいもの方が寒さに強いのか？暮れなずんでなかなか暮れない港町ヘルシンキの青い空を、白神の空やペルーの首都リマの空と同じく、白く区切ってカモメが飛ぶ。

### フィン紀行⑩どこでもトイレ、万歳！

4日目の朝は先ず名曲フィンランディアを作曲したシベリウスの名を冠した公園へ。パイプオルガンを模すオブジェは、風の具合で綺麗な音楽を奏でるとガイド本にあるが、現地ガイドの前田君は鳴らないとあっさり否定。プロテスタント・ルーテル派の大聖堂とロシア正教会もそれぞれの特徴を現して端麗に聳えるが、フィンランドデザイン傑作、半地下の現代建築、石の教会も素敵だ。赤煉瓦のマーケットホールも見学。新しいスーパーやデパートもあり、若者はそちらへ足を運ぶが、対話しながら量り売りするマーケット

は年寄りに人気で、どこの町のマーケットも賑わう。首都のマーケットには最新のブランドショップ、マリエッコも入居。日本にも進出しているが、値段が高いとのことで、古めかしいマーケットのマリエッコショップに日本の COW 達が群がる。

その間に用を足そうとトイレを探すが見つからない。ようやく見つけると鍵がかかっている。雨の中、広場を一周するが見つからない。大都会のど真ん中では、中国の黄土高原植樹ツアーのようにトウモロコシ畑に姿を消す訳にも行かず、コンビニもパチンコ屋もない。仕方なく戻ると若い男の子がトイレの鍵をいじっている。聞けば有料トイレでお金を回収しているという。一回 50 セントだ。財布の中の硬貨を全部出して見せるが、全部アメリカの硬貨だという。同情したのか？ただで入れてくれる。危なくセーフ。額に脂汗、ほうほうのていでマリエッコに戻ると COW 達はまだ買う最中だ。

勝部君がトイレはどっちと聞く。こっち！ 50 セントと教えてやるが、しばらくして 50 セント入れてもトイレに入れない！と、青い顔をして戻って来る。一緒にトイレに駆けつけると男二人と一緒にトイレから出て来る。二人でトイレに入りっ放しだったからかと納得。お昼は前菜、ポーク料理、デザートと旅の葉にあるが、一週間も経つと何を食べたか定かでない。トイレ探しの印象が強烈だったからか？コンビニでもホテルでも、パチンコ屋でも、どこでもトイレの日本は素晴らしい！どこでもトイレ万歳！

#### フィン紀行⑩時空を超えて！

4 日目の午後から 5 日目の午後 2 時、ホテルに集合して空港に出発するまで丸 1 日自由時間。この自由時間に丸山駐フィンランド大使に会うために選んだツアーだが、大使は地方出張で不在、翌朝十時にホテルに迎えに来て頂くことに。買物をするという勝部夫妻とは夕方ホテルのロビーで待合せ、アテネウム美術館を閉館の 6 時まで見て、それからヘルシンキ滞在 9 年目の若いガイド前田さんお勧めのフィン料理のレストラン、フィッシュマーケットに行こうということになる。魚市場の中のレストランでは如何なものか？と懸念も出るが、魚市場の近くにある美味しいレストランとのことで、期待が高まる。

イケメンの前田君、日本で恋に落ち、フィンランド娘に拉致されたという。日本から一番近いヨーロッパ、隣の隣の国とは言え、言葉も生活習慣も違う国で生活する決意をさせる紅毛碧眼はきっと素敵な娘に違いない。紅毛碧眼娘は教員で 2700 ユーロの月給から 800 ユーロの税金を引かれ、消費税 23%(食料は 13%)と税金は高いが、大学は全部国立で、大学まで教育費は無料、小中学校では教科書はお下がりだがノート、鉛筆も無料だ。ヘルシンキ都心の 65 平米の 2LDK のマンションを月 900 ユーロ(12 万円)で借りて住み、大体賃料月 15 万から 20 万円のマンションだと分譲で 7~8 千万円から 1 億円だという。

エレベーターホールの深紅の大きなソファ？オブジェ？に横たわり、携帯で紀行文を打ちながら勝部夫妻を待つ。4 時半頃にホテルの近くのヘルシンキ中央駅を目指すと、アテネウム美術館は白い工事シートに覆われ、19 世紀中頃の民族意識高揚運動の結晶を見ることが出来ないのは残念だが、ムンク、ゴーギャン、ゴヤ等内外有名作家の作品を展示する。

名前は忘れたが、写真のように艶やかで浮き出てくるフィンランド印象派の画家の作品が印象的だ。6時の閉館で追われるように美術館を出て、居並ぶブランドショップをウィンドウショッピングしながらレストランへ向かう。緑地帯のある広い通りに出て左折する。名古屋の久屋大通りのような広い道の両側に素敵なブランドショップやレストラン、カフェが並び、真ん中の広い歩道では楽器の演奏やパフォーマンスが、オープンカフェで語らう男女を盛り上げる。少し先に港が見える。この辺りだろうと思う所に歩道に張り出したテラスのあるレストラン。いい雰囲気。「Finish Restaurant」とあり、肉だけでなく魚料理も、トナカイ肉もある。ガイドの前田さん、FinishとFishを間違えたんだ！日本人だから仕方ないよね！と勝手に決め付ける。先ずトナカイステーキ、ラムも温かい内は美味しいよねと赤ブドウ酒煮も頼み、魚は鯧の幼魚のフライを頼む。一昨日のザリガニシーザーサラダが美味しかったね！と海鮮サラダも頼む。それぞれ地ビールとスパークリングワインを頼み、僕はビールを水代わりに例の地酒もやる。フィン料理は不味いというけど、トナカイもラムも鯧も皆美味しいじゃない！と店名をよく見ると「Finnish Restaurant」。Finishではない。間違えたのは僕らだったと大笑い。

翌朝10時に丸山大使夫妻がホテルに迎えに来てくれる。大きな黒塗りの公用車で来るのかな？と思ったのだが、奥さん運転のシルバーのプリウスは大人5人乗るには窮屈だ。日本国代表として日本のハイテクを宣伝しているのだろう。一昨日の夜ヘルシンキに入った海岸沿いの道を途中まで戻り、橋を渡って対岸の島へ。電動の立派な門が開き海辺の広い公邸に入る。土曜日で日本から同行の調理人、メイドや庭師も休み。広い公邸に2人だけだが、夜は派遣の警備員が門の脇のプレハブで不寝番をするという。公邸でこれが一番高い絵だという伊東深水の額縁の中の美人とツーショット、緑の庭でお茶を頂く。調理人が休みでホテル近くのデパートの中華料理屋へ。中国大使推薦の店で美味しい。

かつて東大の三鷹の寮で起居を共にし、世の中を変えようと一緒にスクラムを組んだ仲間が異国で再会。官界で順調に階段を登り、異国で日本国を代表する丸山大使。日本を代表する国際通信の大企業で腕を奮い、その経験を生かし独立、ベンチャーファンドを率いて国際的に活躍するナレッジカンパニー社長の勝部君。駒場で7年、法学部を2年、計9年かけてようやく大学を卒業、その間7回警察に捕まり、未決とはいえ足掛け3年刑務所生活、40歳で社会復帰、50歳で独立、学生時代からの顔の広さを生かして営業コンサルタントを起業、かつての仲間達に助けられながら生きるはみ出し者の僕。三者三様の人生航路を重ね合わせるように、時空を超えて異国で盃を重ね、帰国の時が迫る。(完)